

はじめに…………… 010

第一章 日本の装幀史を素描する…………… 020

〔上〕本の美術…………… 020

〈装幀の森〉はつながっている……「うつくしい本を出すのはうれしい」……当初からの「版元製本」と装幀への関心の高まり……オーラを放つ〈美しい本〉の最高峰、小村雪岱……近代装幀術を確立した恩地孝四郎と新しい波の到来……原初のかたちを見せつけた齋藤昌三の「ゲテ装本」

〔下〕本のデザイン…………… 045

第二次世界大戦後…きわだつグラフィックデザイナーの進出……大黒柱・亀倉雄策の主張……新たなブックデザインの「文法」を拓いた杉浦康平……菊地信義のテキストに寄り添うしなやかな着地……テキストの事前の読み込み派と読まない派と……ブックデザインの画一化と「不純物」の増加

第二章 目も綾な装飾性が、それとも質実な美しさか…………… 064

ヨーロッパもカバー重視へ……象徴的な西川満の揺れる心情……フジタの
柔軟かつスケール大な作法……美しい紙と美しい印刷と飽きのこないデザ
インと……シンプルこそ複雑！

第二章 様式美を支える版画家装幀と〈版〉の重みと

088

橋口五葉・中澤弘光とそれを支えた彫師、伊上凡骨……肉筆を億劫がり版
画を好んだ小村雪岱……恩地孝四郎の近代人としての時代意識……芹沢鈺
介本の〈型〉の美と柳宗悦の工芸論と……一九六〇年の銅版画家の相次ぐ台
頭と装幀への進出……文才もそなえた司修と柄澤齊の活躍……多田進と桂
川潤の版画家起用作に光明を見出す

第四章 装幀は紙に始まり紙に終わる

書籍のもとをなす〈用紙〉へのまなざし

124

「洋装本」の受容から定着へ……前衛芸術運動の衝撃と素材観の転換……
「構成」の思想とマテリアルへの眼差し……装飾過多なあり方への反旗……
装幀デザイナーの姿勢と出版界の模索……原弘が監修し、口火を切った特殊
紙の開発とその質的充実……はかないからこそその紙の動きを明日につなぐ

第五章〈装幀家なしの装幀〉の脈流

——著者自身 詩人、文化人、画家、編集者による実践の行方

156

〔一〕著者自装の系譜をたどる……………156

北原白秋の「自分の意匠通り」へのこだわり……朔太郎と犀星の挑発……大谷崎のもつともよく知られる装幀論……戦後の著者自装の流れ……台頭した女性詩人の健闘……〈世界のムラカミ〉の記念碑的な自装本……次世代女性詩人のさらなるトライアル

〔二〕詩人による装幀に流れる抑制の効いたリリジズム……………175

吉岡実が開示した「あきのこない本」……吉岡実の継承者、平出隆の最前線を行く取り組み

〔三〕文化人による装幀の多彩な展開……………184

カリスマ建築家、白井晟一の聖なるアルカイズム……渡邊一夫と串田孫一の悠々たる文人精神……異端の文学者・澁澤龍彦の高揚した気分……現代書家であり評論家・石川九楊の孤高の取り組み……真の創作者、武満徹と川久保玲による〈天の配剤〉

〔四〕画家による装幀はなお続く……………

201

悪もの扱いされてきた画家……………次世代画家による装幀の新しい光景

〔五〕編集者の顔が見える「装幀への覚悟」……………

208

社内装が当たり前だった時代と田村義也の主張「装丁は編集者がするのが原則」……………続く三本柱 萬玉邦夫・雲野良平・藤田三男

第八章 タイポグラフィに基づく方法論の確立と書き文字による反旗と……………

220

「建築という書物」の三次元性……………(大谷崎)の横に長い本への提案……………原弘が開いたタイポグラフィへの新しい認識……………杉浦康平が主導した新世代デザイナーによる本文組に始まるチャレンジ……………「百句燦爛」における異社製活字書体の競演……………東アジア固有の共通言語へのまなざし……………和本・洋本スタイルの融合と「散らし書き」リズムの援用と……………「石井明朝」に始まる写真植字用書体の進展……………東アジア固有の版面の衣鉢を継ぎ、「消えゆくものを押しもどす」……………本文あつての装丁」のさらなる進展……………次世代によるフォーマットづくりの深まり……………DTPに対応する日本語用フォントの充実……………それぞれがオリジナル！書き文字名人の脈流……………横尾・和田らの書き文字から「甲賀流」が翻した反旗へ

第七章。ポスト・デジタル革命時代の胎動と身体性の復活と……………274

DTP時代の幕開けと怒涛の波及と……紙の本ならではの蠱惑を引き出す
双壁、祖父江慎と松田行正……山口信博の「消えゆくものを押しもどす」不
退転の実践……新進たちのポスト・デジタル化に向けた挑戦

あとがき……………298

主要参考文献……………301

人名リスト……………302

書籍名索引……………318